

三浦綾子読書会会報

題字:三浦光世

発行:三浦綾子読書会
代表:森下辰衛
e-mail:shiokaripass@gmail.com

巻頭言 耕作と一緒にうなづく

北見三浦綾子読書会 日吉 成人

2018年10月から、北見三浦綾子読書会のオリーブ会で『泥流地帯』を読み始めました。まるで拓一がばっちゃんのために作った風呂にみんなで浸かりながら、わいわいがやがや言いながら、心も体もあつたかくなるひと時でした。

2020年3月から7月まで、新型「コロナウイルス」感染拡大のために、図書館の部屋は使用できなくなり、オリーブ会が開けなくなりまして。その間、90歳のーさんが天国へ行くことになりました。オリーブ会の市三郎のような存在で、「祖父は最初、下富良野に入植した」とお話しされたこともありまして。

図書館が借りられないので、8月からは教会を会場にしてオリーブ会を再開しました。不自由を覚える「コロナ禍」の中で、東日本大震災のことも思い起こしながら、泥流が全てを流していく場面を読み続けました。「涙なしには読めない」と言いつつも、差し入れられた北見名物、大丸のどら焼きをしょっぱさが混ざりながらも頬張り、分かち合いました。ピスタチオを取りながらも、心の鼓動は聞こえてきます。

『泥流地帯』は、ハッピーエンドではありません。「武井シンが亡くなつて、実はじつちゃんもばっちゃんも、良子も、五郎も生きていたんだ」といふことであれはすつきりしますが、「水戸黄門」のようにはい

かないものです。

「外は闇だった」で始まる『泥流地帯』が、「煙」と題された最後の章を汽笛の音で終えています。その音は、家も子も親も流されてしまった泥流の村、闇のような村に、明日、母の佐枝が帰ってくることを知らせるものです。「耕作、母ちゃんばうんと大事にするべな」「うん、大事にする」と耕作はうなづく、汽笛が鳴ります。

聖書が初めて日本語に訳された時、「神の愛」を「神のご大切」と訳されました。愛するということとは、「大切に、大事にする」ということです。煙のような、闇のような、また泥流のような現実があつても、愛すること、大事にしていこうという思い、真面目に生きようという思いがある時、アンハッピーな出来事だけに心が曇らされないのでしょうか。むしろその煙の中で、明日という希望の汽笛を聞くことができないのではないのでしょうか。

綾子さん自身、教科書に墨を塗らなければならなくなり、真面目に一生懸命にやっても無駄だと自暴自棄になり、脊椎カリエスで動けなくなりまして。心も体もボロボロで、馬鹿臭いと毒を吐いていた綾子さんは、前川正さんや三浦光世さんに出会ったのです。そして、二人はあのじつちゃんやばっちゃんのように、命を削って綾子さんを大事にし

てくれたのです。そういう真面目に生き、愛をもって生きる人たちによつて、闇や煙のただ中で、明日という汽笛を綾子さんも聞くことができたのでしょうか。

オリーブ会に、竜宮城から、否、上富良野町から浦島さんが一度も来てくれました。上富良野町が『泥流地帯』を映画にすることによつて、町がハリウッドのように盛り上がるということではないでしょうか。ふるさと納税という追い風もあつたようですが、「コロナ禍」による逆風も多かつたでしょう。それでも、この街に住んでいる方々に、一歩先を行く先輩に困難の中でも真面目に生き、大事にしようという心を持った方々がいることを共有したいと、奔走されています。「コロナ禍」のただ中で、汽笛を聞いている浦島さんと共に、『泥流地帯』最後の場面を読み終えました。そして耕作と同じ様に、私たちも一緒に深くうなづいたのでした。



読書会に来てくれた浦島さん(中央)と

～綾子さんの言葉～

生きている人間で、死なない者が一人でもあろうか。恐らくこの病院の重症室で、人の死ななかつたベッドはひとつもないにちがいない。そしてまた、わたしもいまこそ古い自分がここで死ぬのである。

『道ありき』

